2025年度　中学校入学試験問題

第１回
国　語

【注　意】
1．試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2．問題は一から四まであります。試験開始の合図があったら、まず、一から四まで問題がそろっているかを確かめ、次に問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3．試験中は試験監督（かんとく）の指示に従うこと。
4．試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為（こうい）とみなすことがあります。疑われるような行動をとらないこと。
5．試験終了（しゅうりょう）の合図があったら、ただちに筆記用具を置くこと。試験終了後に、書きこんだ場合は不正行為とみなします。
6．解答に字数制限がある場合は、句点（。）・読点（、）・かぎカッコ（「」）も一字として答えること。
7．問題文は、作問の都合上一部改変しています。

受験番号	
氏　　名	

一

漢字に関する次の問に答えなさい。

問一　次の1～5の――線の漢字の読みがなを答えなさい。

1　時代の風潮を理解する。
2　個展を開く。
3　味のある駅舎だ。
4　彼はとても高潔な人だ。
5　町を縦断する道路。

問二　次の1～5の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

1　日本のホウリツを学ぶ。
2　ガソリンをホキュウする。
3　会社の制度をカイカクする。
4　カンシュウの声援に応える。
5　印刷会社にツトめている。

二

語句に関する次の問に答えなさい。

問一　次の①～③の［　］にあてはまる体の一部を表す漢字を一字で答え、慣用句を完成させなさい。

①　僕は彼女に、［　］が上がらない。
②　欲しいものを買いすぎて、［　］がまわらない。
③　彼は甘(あま)いものに［　］がない。

問二　次の①・②の［　］にあてはまる漢字を一字で答え、ことわざを完成させなさい。

①　あとは野となれ［　］となれ
②　かわいい子には［　］をさせよ

三

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

※1　エッセンシャル…欠かすことのできない物をさすさま。
※2　フロンティア　…本文では、ビジネスにおける未開拓の分野という意味。

問一　A・B・Cに入る語として最も適当なものを、次のア～オより選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　ところで　　イ　さらに　　ウ　それなら
エ　では　　オ　例えば

問二　――線①「不平等、不公平」のように、語頭に「不」が付くものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　可分　　イ　計画　　ウ　常識　　エ　完成

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

（平賀緑『食べものから学ぶ現代社会
―私たちを動かす資本主義のカラクリ―』）

問三　――線②「気候危機」について説明した次の文章のうち、最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　気候問題は地球上の全員が被害者でも加害者でもあるため、人間の間に格差は存在しない。

イ　２０１５年における炭素排出量の52％は、世界人口の１割に過ぎない金持ちが排出していた。

ウ　富裕（ふゆう）層が排出する炭素の割合に比べて、貧しい層が排出する炭素排出量は相対的に高い。

エ　異常気象や環境破壊により、貧しい人たちが移住を強いられ、「環境難民」が増えている。

問四　次の一文は、本文中に入るべきものです。最も適当な箇所（かしょ）を、本文中の〈　ア　〉～〈　エ　〉より選び、記号で答えなさい。

そのため、英国では政府レベルで「食生活由来の健康格差」が議論されています。

問五　――線③「そして『エッセンシャル』なモノやサービスが、ますます安く削られていく」とありますが、その理由は何ですか。四十字以内で答えなさい。

問六　［　X　］に入る最も適当な語句を、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　マウンテン　　イ　フラワー

ウ　ゴールド　　エ　ムーン

問七　――線④「お金の部分だけを増やそうとしてきた」を別の言葉で表したものを、本文中から二十一字で抜（ぬ）き出し、最初の五字を答えなさい。

問八　本文全体の内容として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　利他的な無償労働なしでは、社会を維持することはできないため、「再生産」された労働力こそ、経済学を支える原動力なのである。

イ　自然の資源や人間の労働力には限りがあるため、何かを犠牲にしてでも、とにかくお金を増やそうとする資本主義経済の在り方を、見直していく必要がある。

ウ　資本主義経済の拡大によって、炭素の排出量の格差、食の格差は広がっていったため、利潤が出にくい経済システムを確立するべきである。

エ　ＳＤＧｓの考え方が普及した若い世代にとって、資本主義経済とは過去のものであり、今後は格差を減らす公平な社会の在り方が求められる。

四　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

主人公の「ぼく」は、ある文芸雑誌で新人賞を取った。「本が出たら一番最初に誰に伝えたいか」と質問され、思い出したのは、恋人でも両親でもなくミツザワ書店の「おばあさん」だった。「ぼく」は、生涯でただ一度だけ高校生のときにこのミツザワ書店で、欲しくてたまらない本を万引きしたのだった。「ぼく」は帰省したある日、盗んだ本の代金と自分の本を持ってミツザワ書店に向かった。

こぢんまりとした居間に通され、ぼくはソファに腰掛けた。①ミツザワ書店とは違い、こざっぱりした部屋だった。陽のさしこむ窓に目をやると、埃がゆっくり舞うのがやけにはっきり見えた。女の人は盆に紅茶をのせて、ぼくの向かいに腰掛ける。

「突然すみません」

A　ぼくは言った。女の人はぼくの前に紅茶を置く。香ばしいにおいがたちのぼる。

「あの、えーと、おばあさんはお元気ですか」

女の人は口元に笑みを浮かべたままぼくを見て、

「他界しました。去年の春です」静かな口調で言った。②頬をはられたような気持ちでぼくは女の人を見た。そういえば、玄関になんの飾りもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家にいっていて、ちょうど今日は留守で、私もひまだったんですよ」

「えーと、あなたは、おばあさんの」

「孫です。三年前にここに引っ越してきて、この家で両親と暮らしています」

「それであの、ミツザワ書店は」

「祖母が臥せってから、ずっと閉めています。跡を継ぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲かるような店じゃなかったし、祖母の道楽みたいなものでしたしね。今は駅の向こうに大型書店もできて、うちが店じまいしてもみなさん困ることもないでしょう」

③何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった。自分は凶悪事件の加害者で、警察にいかず被害者の家に自首しにきたような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫びしなきゃならないことがあって今日はここまできたんです」

ぼくはうつむいたまま一気にしゃべった。十六歳の夏の日。秋のはじめの決行。初めて本読みで夜を明かしたこと。拙い感想。三年前書きはじめた原稿。幾度も書きなおした言葉。とんでもないことになったと思った授賞式。夜襲いかかってくる不安。単行本と、それを手にして思い出したおばあさんのこと。

「本当にすみませんでした」

ぼくは財布から本の代金を取り出してソファテーブルに置き、深く

頭を下げた。呆れられるか、ののしられるか、帰れと言われるか、じっと待っていると、子どものような笑い声が聞こえてきた。驚いて顔を上げると、女の人は腰をおりまげて笑っていた。④ひとしきり笑った後で、話し出した。

「じつはね、あなただけじゃないの。この町に住んでいた子どもの何人かは、うちから本を持ってってると思うわよ。祖母の具合が悪くなって、それで私たち、同居するために引っ越してきたんだけれど、はじめてあの店を見て、私だって驚いちゃった。持ってけ泥棒って言っているような本屋じゃない。しかも祖母はずうっと本を読んでるし。私も幾度か店番をしたことがあって、何人か、つかまえたのよ、本泥棒」女の人はまた笑いだした。「それだけじゃないの。返しにくる人も見つけたことあるの。持って行ったものの、読み終えて気が咎めて、返しにきたんでしょうね。まったく、図書館じゃあるまいし。こうしてお金を持って訪ねてきてくれた人も、あなただけじゃないの。祖母が生きているあいだも、何人かいたわ。実は数年前、これこういう本を盗んでしまった、って。もちろん、そんな人ばかりじゃないだろうけどね、そんな人がいたのもたしかよ。あなたみたいにね」それから女の人はふとぼくを見て、

「作家になった人というのははじめてだけれど」と思いついたようにつけ足した。

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がって手招きをした。

玄関から続く廊下の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の人は塗装の剥げた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃っぽいような、甘い菓子のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あのなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですね」

女の人とともに、店内に足を踏み入れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本――。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読んでましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのこともあれば、時代小説のこともあったし、あるとき私がのぞき込んだら、ＵＦＯは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の息子だったからなんですって。祖父が亡くなってからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね」

女の人は積み上げられた本の表紙を、そっと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へも行ったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよね」

それを言うなら子供のころのぼくにとって、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思ったけれど、口には出さなかった。そのかわり、⑤棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本を素早く抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた。

「おばあちゃんは本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽っちゃうんだから」思わず言うと、女の人はまた楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸い込み、吐き出し、誰かに読まれるのをじっと待っているかのように。その中に混じったぼくの本は、いかにも新参者という風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

礼を言って玄関を出た。門まで見送りに来た女の人は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思っているんです」と小さな声で言った。「図書館なんておこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持っていって、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っているんですよ」

「そうなってほしいと、じつはさっき思っていたんです。楽しみにしています」ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございました」女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「そうじゃなくて。お買いあげいただいて」

女の人はおかしそうに笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶の中のミツザワ書店が［ B ］思い浮かんだ。店の前に並べられた週刊誌や漫画、埃で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだろう。⑥世界に通じるちいさな扉は、近々きっと開くのだろうから。

不釣り合いでも、煮詰まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書こう、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらいの小説を書こうと、書き初めに向かう子どものような気分で思う。

顔を上げると、青い空に⑦凧がひとつ浮かんでいた。

（角田光代『ミツザワ書店』）

問一　A・B に入る語を、後の語群のア～エよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　ア　まごまごと　　イ　ぺらぺらと
　　ウ　するすると　　エ　もごもごと

B　ア　断片的に　　イ　かすかに
　　ウ　現実的に　　エ　色鮮やかに

問二　――線①「ミツザワ書店とは違い、こざっぱりした部屋だった」とありますが、「ミツザワ書店」と「居間」との違いが描かれている一文を抜き出し、最初の四字を答えなさい。

問三　――線②「頬をはられたような気持ち」とありますが、なぜ「ぼく」はこのような気持ちになったのですか。その理由を三十五字以内で説明しなさい。

問四　――線③「何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった」とありますが、「ぼく」はどのようなことを「失敗」ととらえていますか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　万引きという重大な罪を犯してしまったのに、警察に行かなかったこと。

イ　警察に行く前にミツザワ書店に来て、家族に万引きを許してもらおうとしていること。

ウ　万引きという自分の犯した罪に対する裁きを受けないまま、家族に謝罪していること。

エ　万引きをしてから十年以上の歳月がたっているのに、今になって家族に謝っていること。

問五　――線④「ひとしきり笑った」とありますが、この「女の人」は「ぼく」を非難せずに「笑った」のはなぜですか。あてはまらないものを、次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア　せっかく作家になって成功したのに、わざわざ罪を告白に来た「ぼく」がおろかに思えたから。

イ　「おばあさん」は本を読みっぱなしで、盗まれても仕方がないようなのんびりした本屋だったから。

ウ　本を盗んだとしても、返しに来たり、お金を持って訪ねて来たりする人は根が真面目だと思うから。

エ　「ぼく」は緊張した様子で謝罪しているが、「ぼく」のような人は初めてではないから。

問六　――線⑤「棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本を素早く抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた」とありますが、「ぼく」はなぜ「自分の単行本」を「置いた」のですか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　子どものころ、出来心から盗みをしてしまったが、ミツザワ書店に自分の本を置くことが、「おばあさん」の思いにこたえることだと考えたから。

イ　本の代金を払ったとはいえ、十分に罪をつぐなえたとは思えず、ただで本を置かせてもらうことが、せめてものおわびになると思ったから。

ウ　自分にとって世界の扉であるミツザワ書店に自分の本を置くことで、子どもたちに扉を開けて自分の本を読んでもらいたいと願ったから。

エ　自分にとって世界の扉であるミツザワ書店に自分の本を置くことは、子どものころからの夢であり、特に作家になってからその願いが強くなったから。

問七　――線⑥「世界に通じるちいさな扉は、近々きっと開くのだろう」とありますが、それはどのような場所ですか。本文中から五十字以内で抜き出し、最初の四字を答えなさい。

問八　――線⑦「凧」は何を表していますか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア　栄光　　イ　決意　　ウ　希望　　エ　思い出

問九　「おばあさん」の孫である「女の人」の性格として、適当なものを、次のア～キより二つ選び、記号で答えなさい。

ア　ユーモアがある　　イ　内気　　ウ　無邪気（むじゃき）
エ　おっちょこちょい　　オ　優柔不断（ゆうじゅうふだん）　　カ　非常識
キ　明るい